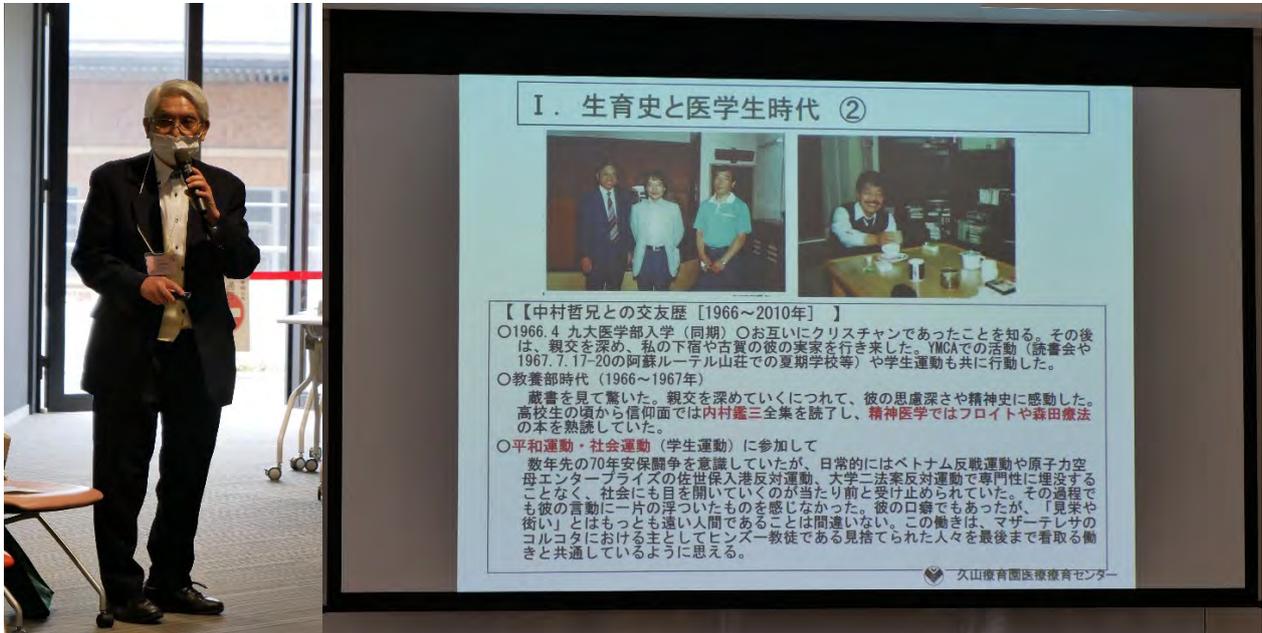


座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録



ミニトーク、閉会



ミニトーク「中村哲医師のキリスト者としての生き方」

ゲスト：宮崎信義 久山療育園理事長・医師（重症心身障害医療）・中村哲医師の大学時代からのご友人

座談会コーディネーター：當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

進行：堀 優子 九州大学附属図書館 e リソース課長

記録：九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

堀：みなさんおそろいそうですね。みなさんたっぷりおはなしできましたでしょうか。

ここから中村先生と同級生でご親友で、現在久山療育園という所で重症心身障害医療に携わっておられます宮崎信義先生からお話をうかがいます。

それでは宮崎先生よろしくお願いたします。

《ミニトーク：学生時代の中村先生、キリストンとしての中村哲医師—宮崎信義先生》

宮崎：白熱した懇談がですね、延々と続いても一つもおかしくないような時間だと思っておりますけれども、私は学生時代から青年医師の時代くらいまでの海外医療協力を決意するくらいまでを中心に話したいと思います。



日本電波ニュース社の谷津さんが関わった NHK の番組でも、ずいぶん以前から、若いときのことを取材されていましたが、何か大学で彼をと言ったら、私しかないような、あんまり手広く交際するような感じじゃないんですね。非常に目立たない存在、でも、後でグッとくるような存在感を感じる人でした。まあ、いつも哲ちゃん哲ちゃんと呼んでいましたので、中村先生とか中村医師とか言うのと、ちょっとこそばゆいので、哲ちゃんとか哲くんとか言うと思いますけども。

そういったことで、主に彼の生い立ちとか学生時代、海外医療協力を決心することを中心にお話しして、3 番目はですね、もうペシャワール会報とか NHK の番組で非常に詳しく正確に語られているので、サッと行きます。それと彼が何を望んでいたのか、「遺志」というのは、当然つらいことですが、有りのままと語っていきたいと思います。

それからわたし NHK の彼の番組を見たり、石風社で書いた本を読むと、自分自身ものすごく領域が違うんですけど、自分が落ち込んでいた時でもそばにいない彼に元気づけられるんですよ。そういったことは皆さんもやっぱり共通しているんじゃないかと思います。そういったこととお話をしていきたいと思います。12~13 分のつもりです。

これは彼がのっていた写真で、西南中とか福高とかのときの、これは菜っ葉服（*注 16）、いわゆる菜っ葉服をいつも着てたんですけども、まあ、こんな格好をして行き来していました。そして、ご承知のように、彼の誕生日は昔は敬老の日だったんですね、それでよく覚えているんですけども、9 月 15 日に中村勉・秀子さんの次男、次男というのは実際は長男なんですけども、養子の方が上におられたわけですね。若松で出生されて、古賀市に小学一年のときにうつられた。古賀西小学校ですね。古賀から中学校は西南学院まで通われました。

ただね彼がいつも菜っ葉服を着ていたのは、お祖父さんの玉井金五郎さんの影響かもしれませんね。いつも現地で写真を飾っていたように祖父の影響も非常に強かったんじゃないかと思います。沖仲仕（*注 17）の親分でね、相当やっぱり差別されていた人も同じように接していたと言われています。

叔父さんは火野葦平という、「麦と兵隊」が代表作ですが、哲ちゃんが言っていたのはこの葦平おじさんはですね、純文学がやりたかったけれども、やはり戦時中だから戦記物を強いられたというのを、とても悔しがっていたと。中学校三年の時にクリスチャンになって、私もその縁で大学生の時に同じ教会に入会したんです。

*注 16： なっばふく。工場労働者などが着る薄青色などの作業服を広く指す。汚れて黄土色になる、撚りの甘い綿が、汗や洗濯でヨレヨレ・しわくちゃになる様子が、萎(しお)れた菜っ葉(なっば)のようだから、など諸説ある。

*注 17： おきなかし。港湾で船の荷揚げ荷下ろしの作業をする労働者たち。船舶を岸に寄せられるよう港湾が整備されていく 1965 年（昭和 40）ごろまでは、船を沖に停泊させ、貨物を舢(はしけ：小舟)に積み替えて陸まで運ぶことが多かった。こうした沖の本船や舢の中で貨物の揚げ降しの作業に従事するため、沖仲仕といわれた。狭く危険な作業環境で迅速に貨物を処理するため、強い統制と熟練を要する重筋肉労働だった。荷役機械の導入が進み、この名称は使われなくなっていった。（参考：日本大百科全書（ニッポニカ）小学館）

火野葦平の『花と龍』は、中村哲医師の祖父母、玉井金五郎（若松の仲士・玉井組組長）・マン夫婦が主人公で、港湾労働の近代化も背景として描かれている。



これが交友している時代で、彼はあまりアルコールは、のちにタバコはスパスパすってましたけれども、イスラム教世界というのもあるしですね、(酒は)飲まなかったようですね。大事な人はみんな天にかえっていったんですけども、教会もおんなじで、仲よしだった児島君という人も福高の同級で同じ香住ヶ丘教会員でした。こういうふうに…

私は大分県出身なので、1966年に入学して、たまたまお互い、佐藤雄二君(*注18)も入れて100人のうち3人がクリスチャンだったんですね。3%というのは日本では多いんですよ。まあそういうこともあって、親交を深めていって、私の下宿や彼の実家の行き来をして、お母さんは、もうとっても親切にしてくださいました。哲っちゃんの古賀の実家が旅館をしていましたので、泊まった時はおいしい朝食を頂きました。

YMCAでずっと活動して、阿蘇ルーテル山荘の夏期学校というのが非常に印象的だったことですね。滝沢克己という、九大の倫理学・哲学の教授で神学者でもあった、非常に優れた方だったんですけども、その方が基調講演をなさっているんなアクシデントなんかがあって、非常に印象深い時でしたね。

(*注19)このあといろいろ、社会問題とか原子力空母寄港(*注20)とかあってですね、いろいろ学生運動、これはもう、新左翼といわれたセクトはちょっと嫌って、YMCAというキリスト教のサークルから誘いに行ったりしておりました。

でも彼の家に行くとはですね、内村鑑三全集がずらーっと並んでいるんですね。「え？これいつ読んだの？」って言ったら、「高校の時」とかね。非常に精神的にはもう、早熟っていうか、フロイトの精神医学を非常に関心を持っていたので精神科を最終的に選んだのだと思います。さっき言ったように学生運動のこともあるんですけども、相手の必要に答えるという、彼はいわば、マザーテレサという有名な方がおられるが、マザーと共通したものを感じておりました。

*注18：九大医学部入学以来の中村医師の親友。ペシャワール会初代事務局長。故人。中村医師弔辞「佐藤雄二君を懐く」；ペシャワール会報31号(1992.5) <http://hdl.handle.net/2324/4362883> (中村哲著述アーカイブ)

*注19：宮崎氏の覚書によると、1967年7月17~20日の阿蘇ルーテル山荘での九州地区学生YM(W)CA連盟の夏期学校に中村哲氏とともに参加。20世紀最大のキリスト教神学者と言われるカール・バルトに師事した滝沢克己教授(九大文学部哲学科)が基調講演で「インマヌエル(神、我らと共にいます)」という深遠な講演を行い、共に学んだ。また、期間内に参加した女子学生が行方不明になり、総出で山狩りをするというハプニングがあったが、幸い大事に至らず、発見された喜びは、滝沢克己先生の影響もあってか参加者に広く共有されたとのこと。『滝沢克己講演集』(1990.6, 創言社)には、1966年7月20,21日阿蘇ルーテル山荘での主題講演「神われらと共にいます」(レジュメ題「インマヌエル(神われらとともに在す)」)、1967年7月18日、同じくルーテル山荘での特別講演「何を支えとして生きるか」が収録されている。1967年の講演でも「インマヌエルの事実」に関する質疑応答や、座談会で滝沢教授がインマヌエルに気づくまでの過程を長く語られたとの記述あり。

*注20：1968年1月、アメリカ海軍の原子力空母エンタープライズ号の寄港(米軍佐世保基地入港)に反対する運動。ベトナム戦争への反戦運動、非核、反米の運動の性格も持っていた。学生含む5万人以上が阻止集会に参加、機動隊は5000人が動員、空母の出港(23日)まで市街地で衝突が繰り返された。九州大学は宿泊等の拠点だった。



それで肥前療養所に、いわゆる医局講座制というのが彼は合わないだろうと、教条的なものが合わないだろうと、最初から精神科の国立肥前療養所病院に入ったんですね。

その時にたまたまヒマラヤとか、ヒンズークシュとのかかわりはここ、これも不思議なんですね。私の所属した呼吸器科の医局の二次会の時に行ったスナックで偶然一緒になった福岡登高会という、米屋さんとかなんとかやってるひとたちの、親父さんの登山愛好家から声をかけられました。愛好家と言っても登山は本格的なんですね。その、福岡登高会の人「報酬はわずかだが同行してくれるドクターを知らないか」ということだから、さーあ、よっぽど登山家は別として、そんな人がいますかね？いや、物好きな人間だったら一人だけおる、とって紹介したらさっそく連絡を取ったみたいで、それからヒンドウクシュ、ティリチ・ミールというふうに進んでいったということですね。

ドクターが同行しないと（山に）入れない、さっきの（座談会でもお話しましたが、道中では）診療拒否できないという、医者を見るとワーツと寄ってくる、その人たちには結核が多かった、熱病もそうだし、そういったことで、思いを残していった、ということですね。

これはもうみなさんよくご存じで、医療に限定されないというのは彼にとっては自然なんですね、私も含めて多くの医学生は専門医志向になりがちな状況でした。私は呼吸器内科医から始まりましたが、現在は障がい医療だから、全ての領域を含むわけです。彼も初めから、その目の前の人が飢えていたらまず水と食糧、感染症だったら清潔な環境、と自然に視野に入り行動するのですね。

それと、驚いたのが、彼はどちらかというともともと不器用なんですね（そう思っていました）。そのこともあって精神科を選んだというのは、これは誤解でしょうけど、そのうちに神経内科の専門をとったり、救急医学、それからいよいよハンセン氏病診療に行くとしたら、「うらぎず」と言って、知覚麻痺があるので外創ができやすく、潰瘍化して切断しないと命を落としてしまう。足の切断って言ったから外科でもすごい技術が必要で危険がありますが、それも研修をして、それから最初は日本キリスト教海外医療協力会というところからベジャワールのミッション病院に赴任して、8年ですね。石の上にも3年どころか8年。最初の方はご家族も一緒に行かれて、小学校にはいるころに日本に帰られたんですね。

事件を知ったのは、私の娘が「哲ちゃんが撃たれたってよ」と言いまして。私はびっくりして、最初の日には命に別状がないと言っていたのが実はそうではなくて、安堵したのも束の間で殉難死しました。不条理極まりないと嘆きました。それまで、海外医療協力をはじめて2019年12月4日の殉難まで35年、コツコツ、淡々と、というのが正しいだろうと思います。

しかも現地スタッフに渡すという意識、これがあった。現地スタッフの育成から軽症化した人の生活の心配（サンダル工場）など、それはびっくりするような彼にしか思いつかないような行動でした。当時はODA国際援助というのはけっこう電気のないところに洗濯機を送ったり、テレビを送ったりするようなものですね、彼はその人にとって治療だけではなく、何が必要なかを的確に判断していたのだと思います。

遺した言葉として、本にも書かれていますけれど「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」、この



通りなんです、かれはこんな格好いいことを言うとね、こそばゆいようなふうにいるんじゃないかと思うんですね。

学生時代から口癖のように言っていたのは、「見栄や銜いでなく、当たり前のことをすればいいんだ」と。それが35年も続けば、すごい活動とすごい共感を生む、日本も現地の人もあつまって、すごい事業につながったんですね。本当にその一点から始まったとしても、ひろがりや深まりを持った要点じゃないかという気がしますね。

「目の前に倒れている人を見過ごす人は、よほど変わっているんだと思う」。

これも偽りなくそう思っているんだと思いますね。これは聖書にもあるんですけれども、だいたい偉い人、祭司とか、いわゆる高僧になれば道をよけていき（善きサマリア人のたとえ）、却って差別されていたサマリア人だから強盗に襲われた人を見すごせなかったのだと。実際差別されていた人が、半殺しの目にあつた人を介抱して助けたということです。そういった聖書的なことが、彼をずっと支えていたというか、その根幹にあつたんじゃないかと思いますね。

活動の経緯はペシャワール会報とか日本電波ニュース社の制作された番組を見ていただいた方がよいと思いますね。驚くべきことは、難民が定着する、今もっと増えてると思いますが、65万人の人が生活基盤を得るということは、ちょっとできないことですよね。

私が学んだことは、「対象者（病者、障害者、難民、困窮者）中心の聖書を基礎とした医療を目指そう」と、学生時代に語り合っていたのですが、それが、ペシャワール会からのちの水の活動にもつながっていったのだと思います。なかなか実現するっていうのは難しいと思いますね。それが医師としての人間としての立ち位置であって、主客転倒してはいけない、と。彼はこういう風に自然に自然体でその姿勢を貫き通したと思いましたね。私は彼に元気をもらいながら、今も障がい者医療で働いていますけれども。

さっき申しましたように、新約聖書のルカによる福音書の強盗に襲われて倒れていた人を助けたのはサマリア人といって、どっちかという他被差別民族の人が助けて、正しいとされていた祭司やレビ人（れびびと）は道をよけていく、そしてそれを問うた人にたいして、あんたも行って同じようにしなさい、と、同じようにしなさいという事が大事なんだ、と。

で、これは新約聖書ですけれども、あなた方によく言うておく。私の兄弟であるこれらのもっとも小さなものの一人にしたのは、すなわち私にしたことなのだ、とこれはもうカルカッタ（コルカタ）の、死を待つ人の看取りをした、マザーテレサもこの箇所を非常に大切にしましたね。

彼はキリスト教的な、聖書的な人だけじゃなくて、彼の人柄、人となりでもあるんですけれども、それがペシャワール、アフガニスタンの支援につながっていったんだということが、非常に私は心に落ちるんですね。以上です。

堀：宮崎先生、どうもありがとうございました。ここから代わります。

《座談の分かち合い—高校生参加者から—》

眞 眞：宮崎先生、ありがとうございました。お若い頃から中村先生と一緒に過ごされた方でないと語れないお話を聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。今日のお話の中にも、グループディスカッションの中で話題になっていたテーマが重なっていると感じました。

各グループに、ちょこっとずつお邪魔させていただきましたけれども、最初のお互いを知り合う時間が過ぎた後、ぐうっと座談が深まっていくのが早かったなというふうに感じました。途中で切るのがつらくてですね、計画を大幅に変更して、こういう形にしましたけど。あと20分ほどの時間、せっかくですので、全体での座談という形で共有する時間が持てたらと思います。

いろいろな立場の方が集まってくくださったおかげで、とてもユニークな座談会になったと思います。まずはじめに、高校生の皆さん、ここまで来てくれたので。今日、5人ですか、参加してくださったの、ですね。なので、高校生の皆さんには、一言ずつ、何でもいいです。今、語りたいことを語っていただけたらと思うんですけど、お願いしていい？ いいですか。順番に、一言ずつ、お願いしたいと思います。

邊見：ペシャワール班の班長を、今やっています、邊見紗来といいます。きょうのお話の中で、自分が今まで考えていた、どういうふうに伝えていくかとか、そういう事の、少しヒントを得られたかなと思います。私が、(中村)先生を尊敬し始めたのは、先生が亡くなってからで、先生と関わったこともないし、本の中とか講演録の中とかでしか、先生の人柄だったりっていうのを知りえないという状況で、どうやって母校に伝えていくか、すごく、今、悩んでいるところです。

私が、伝えていく中で大切にしたいと思っているのは、現地に行って支援するってなったら、自分のこと、利益とかも考えてしまうっていうことも多いと思うんですけど、(中村)先生が、それを考えないで、その土地に合った、なじめるようにっていうところを一番大切にしていたっていうところで、それをもっと深めて伝えていけたらいいなと思います。

あと、皆さんからお話を聞く中で、先生は、普通じゃないというか、ユーモアとかがすごくあふれる方だなと思ったので、そこを切り口にして、今後、伝えていったら、興味を持ってくれる人が増えるのかなって、今日思いました。少しずつ、興味を持ってくれる人を増やして、今後、関わったことがない人が伝えていかなきゃいけないっていう状況でも、伝えていけるようになりたいなって思いました。ありがとうございました。

眞 眞：ありがとうございました。「素晴らしい聖人のような、英雄のような、全く非の打ちどころのないような人物として描かれると、中村先生ご本人は、非常にご不満だろう」という声が、実際に中村先生と一緒に過ごされた方から、どのグループでも出ていましたね。そこで、ちゃめっ気のあるところとか、ちょっとドジなところとか、人間くさいところとか、試行錯誤しながらやっていく姿とかが、語られたと思うんですね。そこって、聞いてみると、ちょっと気分が変わりましたか。

邊見：本の中とかでも、そういう、先生の、ちゃめっ気っていうか、考え方っていうのは少しあったん

ですけど。実際に関わった人の中で、こういうところがちょっと面白かったとか、そういう面白い人となりを感じられたので、そこが、すごく、ここでしか聞けないなって思いました。

當眞 : 思いました。生き生きとした感じですか。

邊見 : はい、すごく。

當眞 : ありがとうございます。では、次の方にバトンを移していただきたいと思います。

松木 : 福岡高校の松木沙和といます。きょうは、アリのマークのグループでお話しさせていただきました。私のグループでも、今後どのようにして私たちが伝えていけばいいか、というところで、藤田さんがおっしゃっていたんですけど、さっき邊見さんも言っていたように、中村哲さんの等身大の姿をもっと伝えていくことができれば、と思います。今、私たちの中では、偉大な先輩というところが大きくあるので、もっと、そこの部分を壊して、身近な存在として、私たちが、同級生とか、同じ高校の人とか、身近な人に伝えていければいいなと思いました。

今回、話をしていく中で、中村哲さんのことを知った上で、私たちは何ができるのかという部分を、もうちょっと自分の中で、伝えていくだけじゃなくて、今後、将来に社会に出て、自分がしていきたいこととかとも関連しながら、中村哲さんのスピリットっていうのを大事にして、どのようにして自分の中に取り込んでいけるか、今後の活動とか行動に生かしていけるのかというのを、もっと考えていけたらいいなというふうに思いました。ありがとうございました。

當眞 : ありがとうございます。今まで知らなかった中村先生の姿も含めて、シンプルに見えてた中村先生、単にすごいって感じだったのが、複雑で、いろんなところがあって、まだまだ知りたいなっていう気持ちと、知った上で、自分もそこと対話しながら、生き方に取り込んでいけそうかなって。あまり神様みたいに立派だと、ちょっと近寄り難いんでしょうけれども、少し自分の生き方を考えながら、中村先生を知っていききたいなっていうふうに感じたっていうふうに聞こえましたけれど、そういうことでいいですかね？

松木 : はい。

當眞 : ありがとうございました。次の方にバトンを渡してください。

中西 : 福岡高校の1年生の中西と申します。今、2人が話されたこととか、まとめていただいたことと同じことを本当に思っていて、人間味のあるエピソードっていうのが聞けて、すごく、ぐっと近く感じました。もう亡くなられてしまった方だし、教科書の中というふうな、それほど遠い存在ではないですけど、本の中の人だったりとか、そういった感じで、遠くなりがちだと思うんです。けど、先ほど、ヒマラヤに赴いたときに、同行して、近隣の医療の必要性を感じたっていうところで、僕も、登山部で所

属していて、登山が好きなので、そういったところで何か近いところを感じたりして。

高校生に伝えていくときとかに、アフガニスタンでこういうことをしてとか、そういう詳しいことを伝えていくことももちろん大事なので、今まで、そういうことをずっと高校の中で伝えてきたんですが、とっつきにくいというか、入り口として、そういう、スタートのエピソードみたいな、人間味のあるエピソードを伝えていくことで、より多くの人、特に若い高校生とかは、興味・関心を持ってくれるんじゃないかなと思いました。

眞 眞：ありがとうございます。そうだね。自分たちが出会った出会い方と、みんなが会おうきっかけをどうつくるかっていうところをつなげながら考えてみると、わりかた、少し自分とも関係が取れそうな人物として現れてくれるっていうことで、いい入り口になるんじゃないかということですね？

中西：はい。

眞 眞：ありがとうございます。あと2人、おられるかな。よろしくお願いします。

藤井：福岡高校の藤井登睦と申します。よろしくお願いします。僕の言いたいことは、さっきの3人と同じようなことなんですけど、中村先生のことを知って、同じ、人間味のある方なんだなって思いました。座談会で聞いたことなんですけど、若い頃から信念を持つ必要はないって。いろんなことをやって、やって通していく上で、信念っていうのが身に付いていくものなのかなと、僕も、そのとおりだなと思いました。あと、自分のことを言っているんですか。

眞 眞：はい、もちろんです。

藤井：自分のことになるんですけど。僕、小中学生くらいの頃まで、ませてたっていうか、ちょっと打算で考えてたような人間だったので。中村先生は、そういう人間じゃなくて、打算とかじゃなくて、もっと人間の根源的なところ、だから、善悪とかじゃなくて、さっきあったように、人が前で倒れてたら助けるのは当然だろうって、そういうことだなって思っ。そういうことを大切にしていたのが、中村先生の信念だったって思いました。今回の座談会を通して、いろんないいことを得られたので、本当に良かったです。ありがとうございました。

眞 眞：ありがとうございます。でも、自分はよこしまだということを、素直に認める誠実さがあるっていいことですね。とてもいいお話聞かせていただいたなと思いました。先ほどから出ている、等身大の中村先生。とっつきにくいところから、いろんなところがあるっていうことと、すごく大層な理想を掲げて始めたわけではなくってって、「倒れてる人を、目の前にいたのを、どうにかしなきゃって」ことの積み重ね。黙々と、淡々と」っていうことをおっしゃってくださってたことと、だんだんつながってきた感じですね。後で、大人の人たちからも、ちょっと追加で、お話、聞きましょうね。では、最後の高校生になります。よろしく。



坂本 : 福岡高校の坂本雄哉と申します。今回の座談会で、藤田さんの話とかを聞いて、僕のイメージでは、中村先生って、寡黙で、そして、手術とかもものすごくまいみみたいな、そんなイメージがあって。藤田さんの、等身大の先生について話を聞いて、実は手術が不器用だったとか、話し好きだったとか、自分のイメージと実際の先生の姿が、すごく離れていて、イメージが壊されて。でも、今まで「偉大なことをしてきた人」というイメージがとてもしっかりあったので、自分のこととして、自分に近い人なんだなっていうのも感じられて、良かったです。

中村先生のことを他の人に伝えるときって、どうしても「偉大なことをした人」っていう堅苦しい感じの説明になってしまって。他の人とかから聞いたら、自分のこととして考え難いイメージで、今まで他の人に伝えてきていたので。今回の座談会の話とかで聞いたことで、等身大の先生っていうのを、他の人に、興味・関心を引いて伝える、プラスの何かの魅力っていうのを、今後、伝えていきたいなと思いました。本日はありがとうございました。

眞眞 : ありがとうございます。結構、不器用だったっていう話は、どのグループでも出ていました。その不器用な人が、手術をするために韓国まで学びに行ったとか。高校生の皆さんの話を聞いていると、生きてる中村先生と出会う機会は残念ながらなかったけれども、人としての中村先生に、今回の座談会を通して出会えた感じ、ちょっと語り掛けてみたいっていうふうな気分になれたっていう、そういう気がしましたね。

一方で、お話聞いていると、やはり偉人でもあるっていう面もあるんで。非常に近寄りやすいチャームポイントと、65万人が干ばつの中で命をつなぐことにつながっていったところとが語られていました。それを、「淡々と、黙々と」っていうので、いくつかのさまざまな語りが、実はすごくつながっていて、中村先生の活動のリアリティーが生まれたっていう感じがしたんですね。この点に関して、谷津さんが、「口を真一文字でキュッと結ぶときと、力が抜けた時」と、この緩急のことをちょっとお話しされていたと思うんですけども、その話、少ししていただいてもよろしいでしょうか。

《座談の分かち合い—中村哲先生の姿を伝えていく—》

谷津 : すみません、僭越ですが。中村先生取材してた中で、ちょっと思ってたのは、中村先生が、医師としての、人の命と向き合うとき、医師として用水路建設に向き合うときと、それが終わって例えば宿舎に戻って皆とご飯食べてるときとの落差が、すごいあってですね。現場にいるときは、中村先生の目には力が宿っていて、口をぐっと一文字に結ばれていて、もちろん無駄口もたたかないですし、ただ静かな闘志があるっていう感じだったんですが。そこから一步離れると、人間の脳にも限界があるんでしょうね。技術以外のことだと、かなりいろんなことが抜け落ちたりしてるようなところが散見されていて。そういうところが、中村先生をみんなが愛するっていうことになったのかなって、ちょっと思ってたのは、すごく僭越な言い方すると、何か先生のためにしたいって思わせてしまうところがあってですね。その吸引力は、すごいものがある。

言葉も文化も宗教も民族も違う、アフガンの人、パキスタンの人、なぜ先生に付き従うのかなと思うと、多分言葉でいろんなことを説明するわけじゃなくて、先生の人柄とか現場でのすごさ、真剣さ



ていうことを、一目で分かるんだと思うんですね。だからこそ、皆さんが、中村先生のためならってことで付き従った。パキスタン、アフガニスタンのほうもそうだったな、私自身もそうだったなというふうには思っていました。

眞 眞：ありがとうございます。「言葉で何を言うかではなくて、何をするかだ」ということは、中村先生が繰り返しお話しされていたということで。この何をしたかということ自体が、揺るがないこととして、現地の人たちの目の前にあった。それから、何をしてもらいたがっているのかとか、何が必要なのかというところを見定めつつ、何をするかを判断する。そして、取り組みながら、また見定めていくみたいな動きを、非常に丁寧にされていたと思います。

その中で、いろんな形で、「つい手伝ってみたいくなる」とかって、おっしゃっていましたが、中村先生が苦手なところ、ここは自分がしなきゃっていうふうにして拾いながらやってこられた方が、たくさんおられるんだと思うんですね。それをちょっとお話しただけだと思えますけれども。石風社の福元さんは、その辺りはいかがだったでしょうか。

福元：何がですか。

眞 眞：中村先生と出会われて、先生が、ここは苦手だとか、このところっていうのは、自分が引き受けて、ちょっとやってあげなきゃなっていうふうな感じの気分になる、人が、一緒に取り組みたいと思うようなところがあったっていうお話が出ていましたけれども。その点に関しては、ご自身の体験から、何かありますでしょうか。

福元：そうですね。もう。

眞 眞：あり過ぎて？

福元：そうですね。どう言えばいいんでしょうかね。難しいな。先生にできないことを私がやったっていうことはないのですね。

眞 眞：そうでしょうか。

福元：はい。どんなふうに言えばいいんでしょうかね。

眞 眞：ちょっと、私が見ていて、日本に帰ってこられた時間っていうのが、非常に貴重な時間でもあったと思うんですけれども。そのマネージメントみたいなところを、丁寧に、福元さん、されているようなことも含めてですね。結局、全体が回っていくのに、中村先生が、全てを統括して、全てをモニターして、家族の生活も、日本での活動も、現地での活動もっていうふうにならなかつたんだと思うんですけれど。

福元 : 私がやってたのは、主には広報です。最初のうちは、「哲っちゃんがやるから」というふうなことで、皆さん、集まられたと思うんですね。ペシャワール会の立ち上げ時の会員は、同級生であるとか、山の仲間であるとか、あるいは、教会の関係者の人たちとか。それが、徐々に変わっていく。つまり、中村先生の事業に共感する人たちによって、会が質的に変わっていくわけです。そのときに、中村先生のやっつけていらっしやることを、会報であるとか、書籍であるとか、あるいは、マスメディアで伝えるというような広報の一端は、やってきましたけれども。中村先生自体が、ある意味で、シンプルに見えて、非常に複雑な人で。物事を複合的に考えるっていいですか、非常に深く考える人なものですから。その辺の、思索の人としての中村先生を、伝えていくことのお手伝いをしたってことはあると思います。日本にも世界にも良心的な医師はたくさんいらっしやるけれど、中村先生のような構想力のある人は稀です。

ある意味では、あの12月の4日の事件によって、全国の人たちに知られていくことになったわけですが、2001年の9.11のときに、日本中が、中村哲とペシャワール会を発見したっていうふうなこともあったんです。まずは事業を、中村先生がやった事業を知っていただくってことと同時に、中村先生っていうのは、非常に深い思索の人であったと思いますので。それが、本だとか、いろんな形で残されております。私も、中村先生の文章については、ほとんど、99パーセントぐらいは目を通して関わってきましたので。それが、次世代に伝わってのために、自分のできることをやっていこうとは思っております。

眞眞 : ありがとうございます。これから、中村先生がされたことを生かしながら今後につなげていくっていうときに、どこの部分で自分がどう関わられるかを、それぞれが考えながら動いていくことになると思います。

その中で、何よりも、まず出会うということが必要ですが、中村先生が生きておられたときには、今日、大学生の中にも講演会を聞いたということが一番最初のきっかけだったという方がいました。高校生たちは、亡くなったという記事を読んだことが、存在を知ったきっかけだったということでした。メディアの方々が、メディアを通して、中村先生のことについての報道を、工夫しながら続けていくことが、結果的にそういう出会いの機会を継承していくことにも繋がることと思います。

みんなで一丸となって一つのことをしていきたいと思いますということではなくて、それぞれの立ち位置で大事と思うところをつないでいくことを工夫していきつつ、時々集まって、それぞれのことをシェアし合う、ということで、また方向を見いだしていくというような、そういうサイクルが回っていくことが大事なのかなっていうことが、今日この会に参加させていただいて、私も感じたところです。

そういう動きの中で、大学だからできること、大学がやったほうがいいことを見極めながら、ご相談させていただきながら、場をつないでいく、機会をつないでいくことができればと思います。そして最終的には、涸れない泉のように、中村先生が生きてこられた中で実現したこと、それに触れて活動してこられた方々から学べるのが、泉のように、こんこんと湧き続けていくことが大事ではないかと思いました。今、これだけいろいろ難しいことが起きている世界の中で、一つの智慧の泉、励ましの泉、心のよりどころと生き方を考えるきっかけとなる泉。それを涸らさない、一時期の打ち上げ花火ではなくて、こんこんと、淡々と涸れない泉のように続いていくことが大事だと感じました。



それでは、ちょうど、あと数分になりましたので、まだ続けたい座談会の時間ですけれども、私のコーディネーターは、ここで終わらせていただいて。ここから、総合司会の堀さんにバトンを渡します。どうも、皆さん、ありがとうございました。

《閉会のあいさつ、中村哲先生九大プロジェクトの役割―内藤敏也理事―》

堀　　：皆さま、お疲れさまでした。本当に、このような会が持てて、胸がいっぱいです。最後に、九州大学の内藤敏也理事より、ごあいさつを申し上げます。

内藤　：九州大学、「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」の取りまとめをしております、理事事務局長の内藤でございます。まずは、このような機会を持てたこと、この会が、とても盛大に開催され、また、多くの皆さまに、確かなものが残せたことに深くお礼を申し上げさせていただきます。私も、それぞれのグループを、見て回らせていただきました。多くのグループでは、中村先生の実像とか、中村先生をどう伝えていくのかというようなことが、かなり議論になっていたかと思っております。

グループによっては、派生して、現在のアフガニスタンをどう評価するのか（欧米系のマスコミで報じられるままの評価でいいのか）どうかというようなお話もございました。

私としては、中村先生を、いわゆる偉人として後世に伝えていくというよりは、中村先生の行動であるとか、悩みも含めた考え方であるとか、試行錯誤の経過であるとか、そうした事実をきっかけに、いろいろな議論をしていく、あるいは、こうした場で、さまざまな思いを交わしていく、これこそが、これから私どもが目指さなければならないことかと思った次第でございます。

ここで、私どものプロジェクトの現在の状況について、簡単にお話をさせていただきたいと思っております。「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」として、今、三つの柱で事業を進めております。一つは、鎗木先生にコーディネーターをいただき、九州大学の基幹教育科目として、今年度（2021）から開講をいたしました「中村哲記念講座」。これについては、次年度も引き続き開講し、受講生、あるいはTAという形で協力してくれる学生たちとも、中村先生をきっかけとした様々な議論を、展開をしていきたいと思っております。

二つ目が、「中村哲医師メモリアルアーカイブ」。(座談会会場のきゅうとコモンズの入り口を指し) そちらにあります展示スペースの運営でございます。これにつきましては、本日ご出席の方も含めて、いろいろな方のご協力をいただきながら、さらにリニューアルもしてまいりたいと思っております。

三つ目、これが、今後大きくなっていくであろう「中村哲著述アーカイブ」でございます。中村哲先生が残されたさまざまな著述などを、デジタルという形で、まさに今後の九大図書館の一つの目玉として、外部の方々にアクセスいただけるアーカイブとして運営してまいりたいと思っております。ここにいらっしゃる方々も含めて、多くの方々から資料をご提供頂き、日々、充実させていくところでございます。ここで、お礼も含めてご紹介をさせていただきたいのですが、実は、石風社様とペシャワール会様のご協力とご許可をいただきまして、中村先生の著作の本文を、この著述アーカイブでご紹介できるよう、進めているところでございます。この準備が整い次第、公開を進めてまいりたいと思っておりますので、

どうかよろしくお願いいたします。

このようなさまざまなプロジェクトをつなぐものとして、今回のようなイベントも、折に触れ開催させていただきたいと思います。今回は、高校生の皆さんや、「哲縁会」という形で活動している九大生の皆さんとも、つながるきっかけになったのではないかと思いますので、さまざまな活動をつなげる中心（ハブ）として、九大がお役に立てればというふうに思っているところでございます。

最後に、お礼を申し上げたいと思っております。本学の活動を行うにあたって、日々、大きなご支援をいただいているペシャワール会の皆さまに、改めてここでお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。それから、本日ご出席いただいておりますマスコミの皆さま。報道を通じてだけでなく、資料の提供や、さまざまなサジェスチョンをいただくといったご協力を日々いただいております。今回は、どちらかという、個人参加的な形でつながらせていただきましたけれども、今後も、マスコミの皆さまのご支援、ご協力や、ご助言をいただきながら進めてまいりたいと思います。改めてお礼も含めてご紹介をさせていただきます。どうもありがとうございます。

そして、何よりも、この日曜日、さまざまなご予定もある中で、本日、ご出席をいただきました多くの皆さまに、改めてお礼を申し上げます。

また、私の立場として、今回、運営にあたっていただいた九大教職員の皆さまにもお礼を申し上げたいと思います。今回、全体のコーディネートをいただきました鑓木先生に、當眞先生、久保館長、飯嶋先生。それから、準備の中心になって活躍いただいた図書館 e リソース課長の堀さん、いろいろ頑張っていたいただきましたスタッフの皆さんに、改めてここでお礼を申し上げまして、最後、今回のこの会を閉じさせていただきたいと思います。

本当に、今日はどうもありがとうございました。

(了)